

金毘羅參詣名所圖會 六

ル 4
3525
6



門 几 4  
 號 3525  
 卷 6

金毘羅

金毘羅參詣名所圖會卷之六

目録

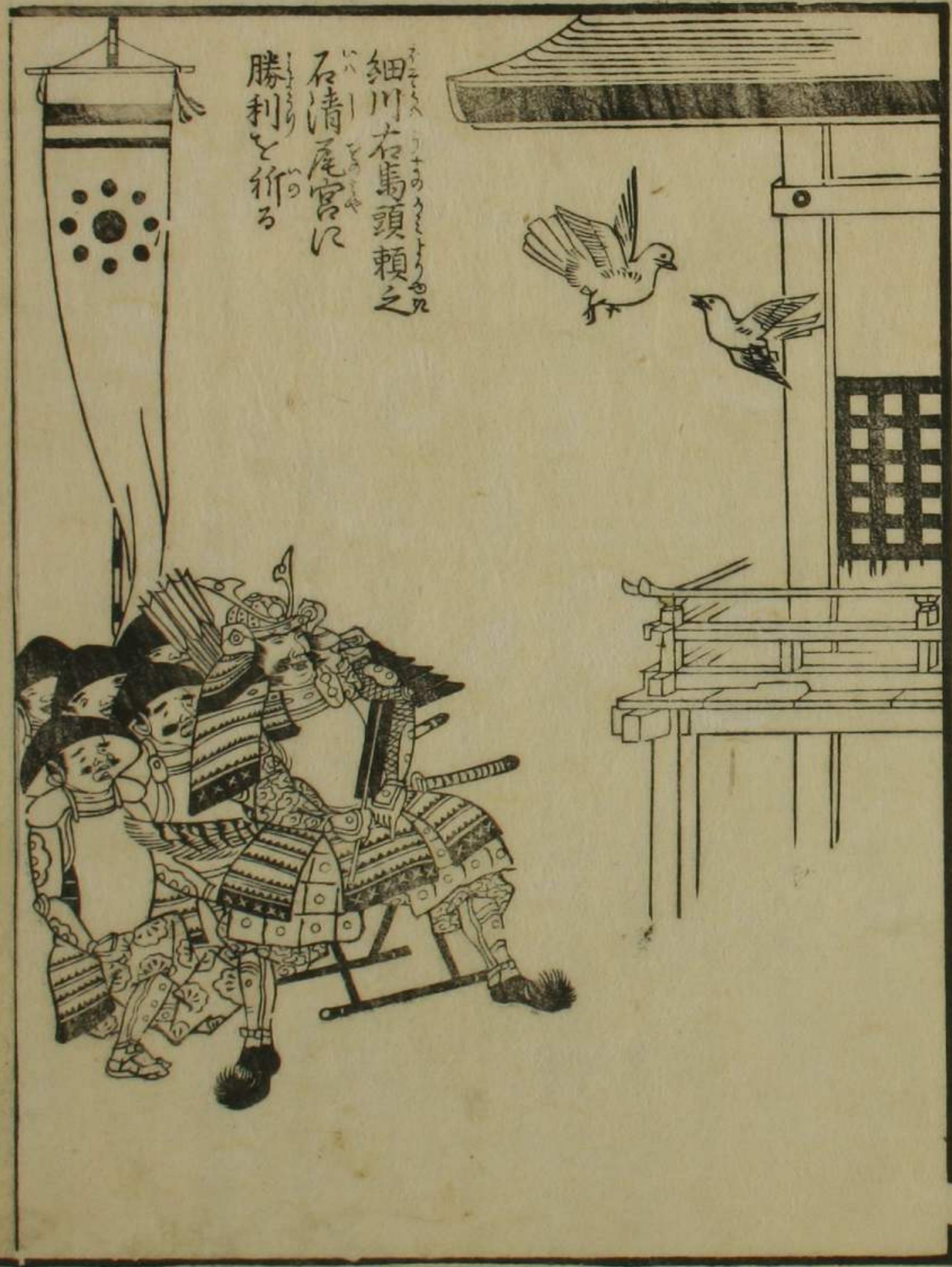
頼之八幡宮に勝利祈る圖	石清水の宮	石清水本宮	神樂殿
神明宮	隨神門	夢空塔	藥師堂
神馬舎	中の鳥居	御供所	回廊 反橋
石鳥居	道祖神の社	雨師風伯の社	放生川
行宮	神樂殿神雲舎	阿弥陀堂	一の鳥居
大天神社	松島	阿彌の茶屋	石橋 石鳥居
高松鎮城	瀧元塩濱	相引の潮	春日川
新川	梵子石	不喰梨の樹	屋島寺前板所
弘法大師加持水			疊石

嘉十六年一月十一日寄  
 尼野貴美氏贈

石鍾乳	屋島寺	御影堂	釈迦堂
千躰堂	中門鐘樓	二王門茶堂	獅々の嶺巖
仙人窟	鉢の淵	血の池	屋島山
屋島の浦	屋嶋の古城	窪淵の社	窪底の古蹟
影向墳	牟礼高松の松原	次信の碑	安徳天皇の社
檀の浦	屋島の内裏之古趾	側寄の堂	惣門の古趾
宗高新石	同駒立石	扇の的の圖	景清頼引の古趾
景清勇力の圖	小橋太水練の古趾	同高名の圖	義経子流の古蹟
義経子握の圖	盛嗣宗行が鞆と引切る圖	次信が靈空信が夢中に現る圖	黄牛崎
佐藤次信の墓	次信が靈空信が夢中に現る圖	武礼高松の柴山	大夫黒の馬の墳
武礼高松の柴山	丸生山	鞆掛松	喜岡寺

金六ノ目之

高松左馬之助墓	行志摩守墓	唐人彈正墓	喜岡の古城
古高松の郷	平家蟹	王之墓	王屋敷
長刀泉	菜切地蔵	義経野陣の趾	六萬寺の趾
辨慶野陣小汁と煮る圖	浦島下知之記		



細川右馬頭頼之  
 石清尾宮に  
 勝利を祈る

石清水宮

高松の府の神の方より一府中の主土神なり此山と亀尾山と号し

本社 祭神一座 應神天皇

東百山上より

幣殿 本社より

燈道の下より

神樂殿御贖所

本社の階下右の傍あり

神明宮

本社の左山上より 神明宮の左あり

琴寶塔

神明の宮の後の山上者 細川右馬頭頼之建立

薬師堂

發道の下南の傍より 瑠璃神馬舎 石段の下北の傍より 木馬と

隨神門

光佛と安んず弘法大師作 正西東より 廻廊 隨身門の左右より 連る 御供所 廻廊の傍あり

反橋

門前細き川より 社頭小献燈の石燈籠末社より

石鳥居

馬場の東西行程凡十町余道幅凡廿間余左右人家軒をふらふ 傍に松の大樹あり 雨師の傍あり

中鳥居

同馬場より 雨師風伯社 鳥居の南の傍あり

放生川

二の鳥居の向より 行宮 放生川の東北の傍より 前の地蔵 石橋と架る 例祭の御旅所あり

金六ノ一

道祖神社

左の傍より 門出の神といふ 株田彦命と祭る

阿弥陀堂

馬場の右より 南ニテ寺 觀音寺 北ニテ寺 西願寺 淨光院 圓満寺 小あり

一之鳥居

此邊に茶屋町あり

八幡宮本紀

當社八延喜八年八幡大神香川郡龜の尾山小鎮座せん 訛宣し給ひらる

時山小光氣いつて雲間よりかやと溪曲妙音と發は是よりつて國司山の

前小神殿と作る石清水八幡宮と勸請し石清水尾八幡宮と号し奉つる

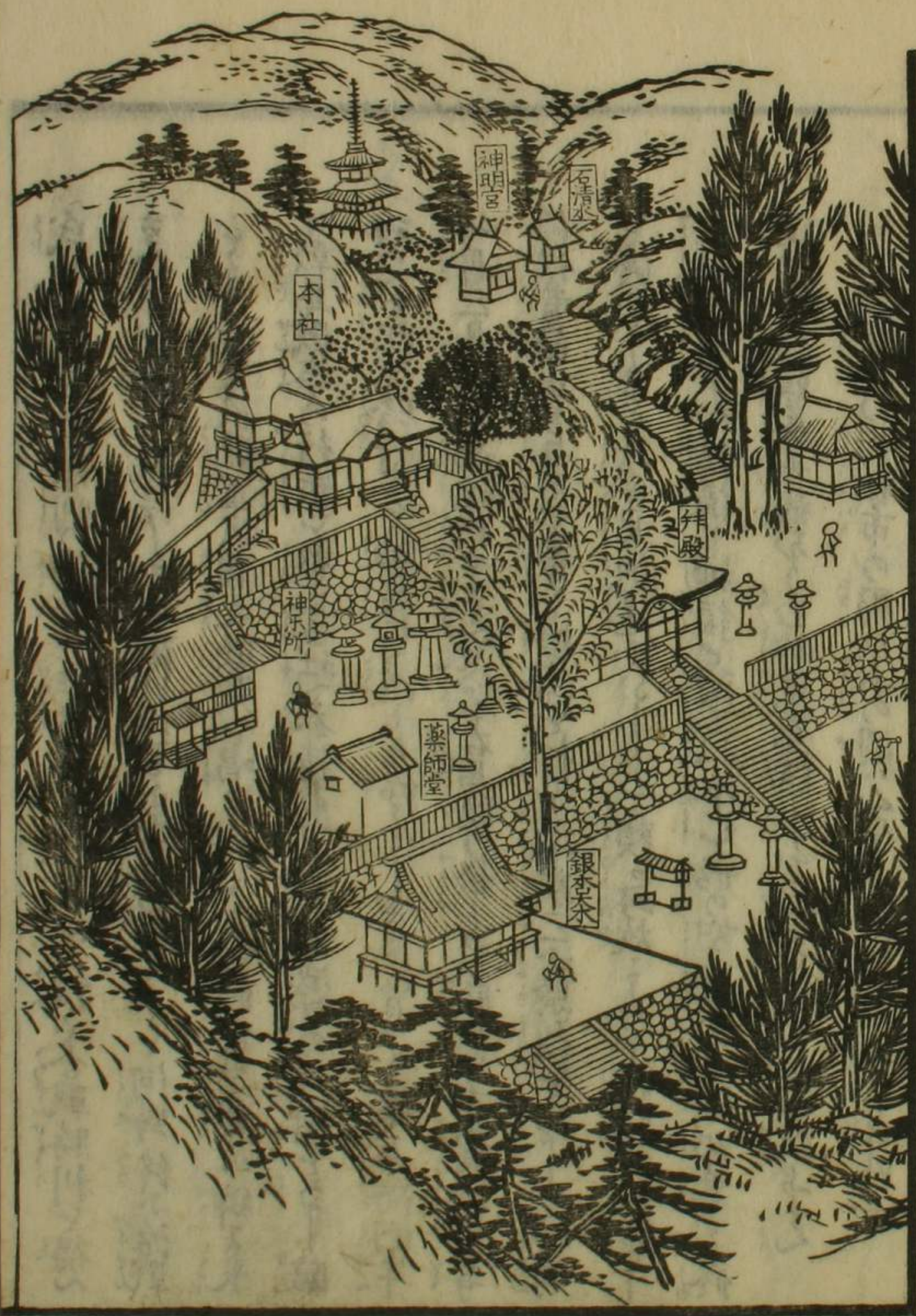
るまゝ石清水と亀尾山の両名を取て名付らるるやと

例祭八月十五日放生會執行する又四月二日に祭礼の是と俗に右馬頭

祭といひ其日の市と右馬頭市と号し其賑はさし言語絶は此日と

右馬頭祭といふも負治元年細川右馬頭頼之相模守清氏と合戦の

時深く當社八幡宮に祈願して神助とこれらに靈驗揚焉とくはの清



金六ノ二

氏と亡一同一年豫州の河野を征伐の時即當社に詣り合戦勝利を得ん  
 まで祈り深く故信して出陣然る小靈驗揚焉何野終小敗戰  
 ころそ能く敗軍に頼之歎歎と唱て稍く香河那笑原の郷に來  
 て戰馬戰卒の行粧と整當社へ奉請あつて之願成就の拜謝とす臨  
 時の祭祀と修行して神慮と清しめ給ふ四月二十日故今尚例年  
 卯月二日臨時の祭祀行ふ是と俗小右馬頭の祭とい賑ひと右馬頭市と号  
 以往昔甲甲弓矢と帶し騎馬と打て五十騎二十騎とたゞしと神前  
 し渡りし後世其例絶たしと頼之此故とつて社頭と修造し  
 末社に至るまで結構し神領と附て社余と形の如備今尚邦君と終  
 造りて社頭益表觀かむと神威感隆りて利生凡民の土亦及ぶと  
 祭礼の行粧市の賑ひの國々々々拾遺の篇小出

又傳云細川頼之河野を攻る時先當社に奉幣し神樂と奏せしる凡將  
 人廊廟の語負薪の言と陶ろと権祿の第一なりとて祈願あり丹  
 精と神んで祈らむと公忽ち神威の龍鳴動し山鳩一番宮中へ飛來り  
 東西小別きて戦ひたる西の方もけ東の方勝て是と追らる頼之信々  
 感応りつて宿願を明けぬ嬉し馬物具戦具を用意し阿波土佐後破と  
 箇國の軍勢を引平し伊豫國に向て河野と亡び終に國と至均やんを  
 大天神社 石清尾の馬場の半途より左へ高松の天神も後

本社 祭神 天満大自在天神 神樂行 御供所 神樂舎 社頭の左  
 訶梨帝母社 境内西の傍より 表門 正西 南 鳥居 同上 石橋 同前の地  
 其始り今の稲荷明神の社地より生駒一正公此地に移り則雜賀氏の  
 城跡より社壇の壯觀美を及せり

高松鎮城

香川東郡より往昔津城下より前八輪島といふ島ありて

御城北の濱邊より其御要害の結構下民の言をいひ御城邊に武家  
方の御屋敷雲霞の如く立列る市中商家職家軒を並べて交易工業は  
あは濱の濱方より數多の入船所せし迄に纜を懸て積入るあり揚るり賑は  
夏朝暮ともく沖の方より女木島男木島直嶋木西より白峯の山つた東  
公島南八阿州の山々まで眺望風景の勝地國中第一の繁華なるを神社佛  
閣許より何れも壯觀端麗あり事繁盛と云ふも畧し拾遺の如きは  
松嶋 御城下の傍より二村あり此所後駕屋あり

郡田山

阿萬茶屋 春日川 新川 高松より八島といふ街通あり

浮え村 此地の塩を最上と稱し赤穂と分る  
相引の潮 同村より八島山の南麓より今八川と云うて橋を置せり相引川もつ  
東西よりくる川の間なり

往昔此地へ海して屋島の南麓と廻り東西小分まぐる故に満る時ハ  
東西より潮寄来つてこの所へ行會する時此所より双方へ引き相  
引の汐と云ふ名相引の濱もつり今尚細き川と云う橋をわたりて  
ともゆの満りて相引の古風残まら

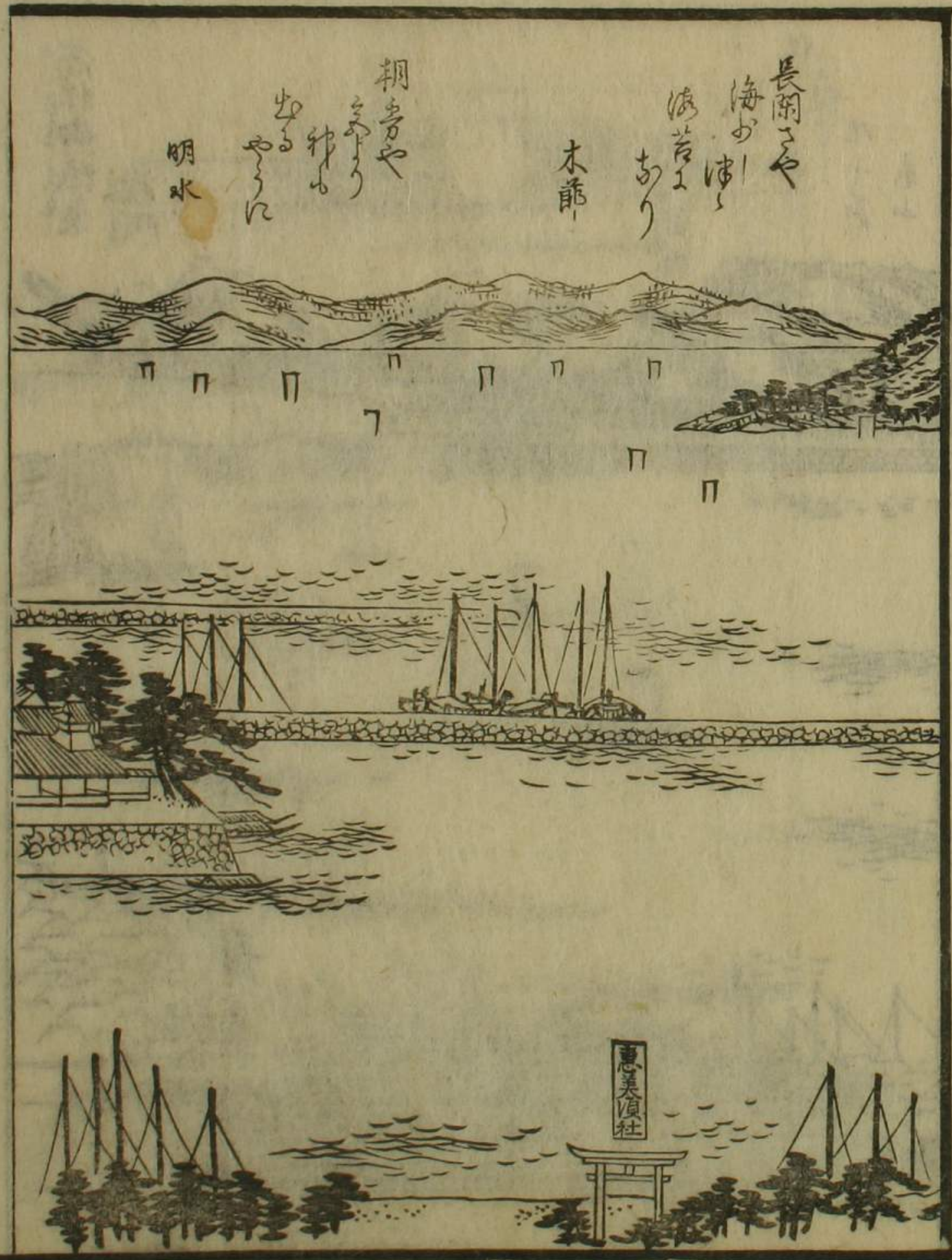
屋島寺前札所 浮え村より則ち屋島山よりなる是より山上に至ること  
十五丁許あり

弘法大師加持水 麓より十余町往來の右の傍より弘法大師加持玉ふと記す  
梵字あり用い給ひてを並ひての地藏尊と建る  
梵字あり 加持水の右の傍より大余の般若系阿字と鐫け

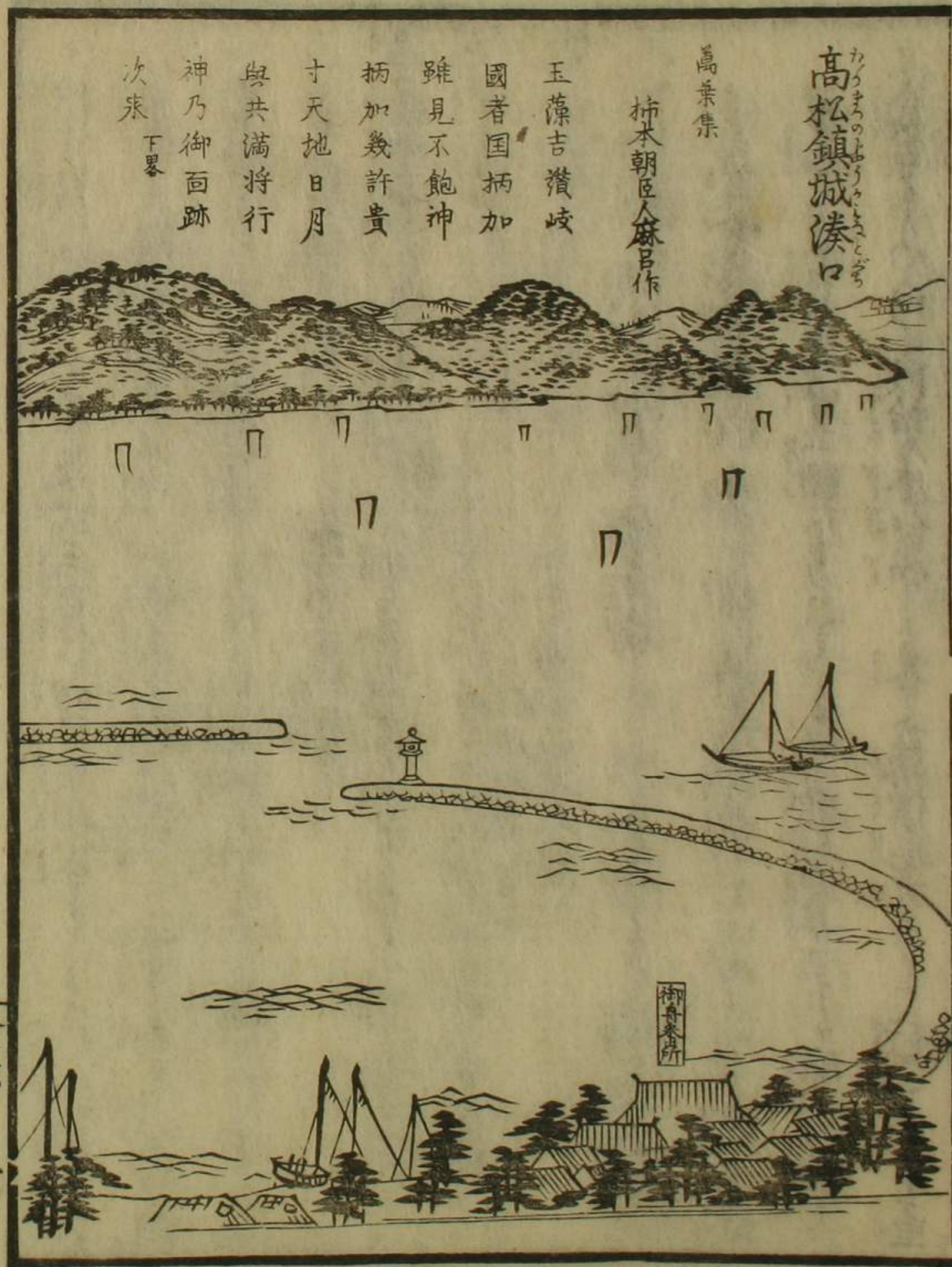
不喰梨樹 浮え村より八島山に登る半腹より今其古樹をまて傍に一本生  
ずり

傳云里俗爲業此樹に登りて梨の實を許すり居たり折る旅  
僧来りて其梨の實二顆たまりれと云ふ里人慣食して阿訶此實ハ  
食るとりめより恰も木の如と各々後僧爲方りて行と云りり里



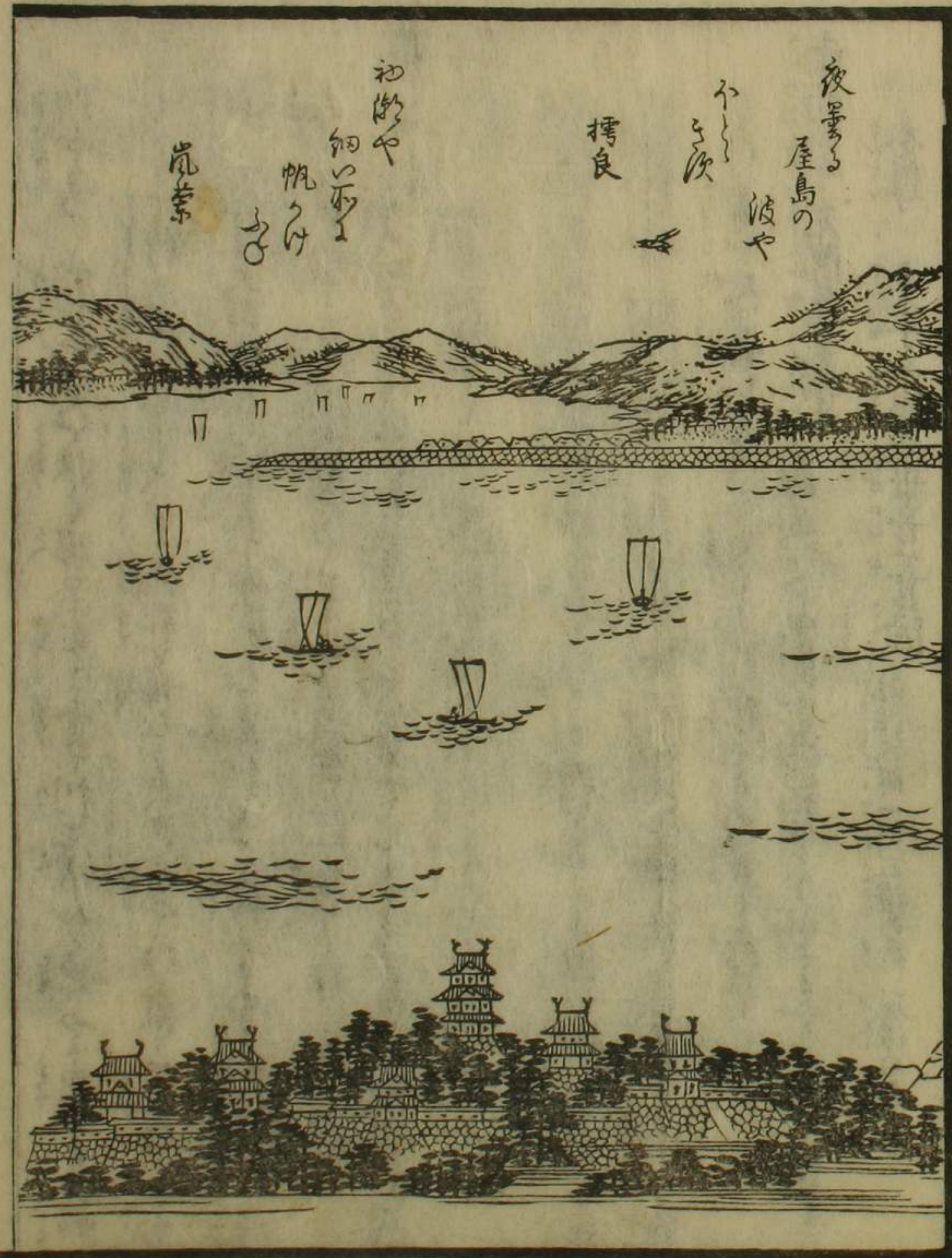


明水  
 朝方也  
 海  
 長閑  
 木龍  
 あり



高松鎮城湊口  
 萬葉集  
 柿本朝臣麻呂作  
 玉藻吉濱岐  
 國者国柄加  
 雖見不飽神  
 柄加幾許貴  
 寸天地日月  
 與共滿將行  
 神乃御百跡  
 次米 下畧

金六ノ五



何心もろく此梨の實を採り歸りて市に賣て利を得んと思ふも木の如くして神も味ひぬ大いに先づ悔むとも先づ悔むと止めを正しく弘法大師賤民の邪見を根ふらん為かろし給すりのとをさる後世人不喰の梨と号し末世のつるをて慈悲の心を生ぜむる基とん

石鐘乳 疊石 不喰の梨の如くは山路すて重くしつるの岩のつるに至つての糞

石鐘乳 疊石の具洞窟より出る窟の中氷柱のてり下りて白くく雪のごとく

石鐘乳其能致送上氣と治し目を明くし精と益し五臟と安し百節と通れん穀と利し乳汁と下し氣と益し脚弱疼冷と療陰を強くし久し服とれば年と延べ壽と益し春本と忘むれとりの言くたはれ云

南高山子光院屋島寺 四圍遍れ八十四番の靈場を築く山とに至る凡十八町なり

本尊 千手千眼觀音菩薩 弘法大師一刹三禮の作座像の長二尺

梵字石加持水



梵字石 守成  
南高山子光院屋島寺  
佛と  
夕の那

加持水

御影堂 本堂の左の傍より私法大師と安ん

釈迦堂 本堂の左の向の西面、建釈尊と安ん

千躰堂 釈迦堂の左山の巖あり、観音の尊像千躰と安置  
萬治四年五月十八日 邦君徳頼重公御建立

鐘樓 千躰堂の右の向より、中門 本堂の正面より四天王と安ん

二王門 中門の向より正回より、茶堂 本堂の右の向より東向

本坊方丈客殿庫裡、本堂の右の傍より列せり、當山の縁起、漁平合戦

の形勢と画々懸物二幅と藏ん、任せて拜見せしむ至つて古画

獅子之嶺巖 寺に去事二丁許西より、日想觀の地ありと云此地より八ヶ國と

仙人窟 北の山中ありと一里あり、有往昔仙人あり住し所とぞ

鉢ノ淵 右の峯より、勢の方八丁許海中より、鑑真將來の鉢と沈めし跡とぞ

血之池 本坊と去事二丁許あり、傳云漁平の合戦、血を洗ひし池ありとぞ

當寺、八皇四十六代孝謙天皇の御宇、天平勝室六年、唐土揚州の鑿真和尚、日本純

淑と阿久来朝の時、船中、於て遠く此山、瑞光のたのを見、船と海岸とせと

せ山に登臨し、其形勢と觀察、以時一人の老梅鳩の杖をつと、出現して、い

此山つと、人間の境あり、天仙遊化の靈界なり、今より此地と足下、授

く、佛法と恩隆して、凡夫の患難と救ひ給へ、いづか、然して、形美、鑑真

こそ、神秀の地とれ、て大悦び、鉢と此山遺し、く、印し、帝都より

て、天皇、謁、帝、志、崇信、玉、東大寺、住、ち、後、大殿の西、戒壇院、持

へら、ま、戒法と行、せ、此時、屋島の奇瑞と奏、以、帝、詔、く、屋島山と鑑真

に、授、け、戒、律、の、境、く、給、鑑、真、と、ま、ら、我、弟、子、空、鉢、惠、海、律、師、と、ら、あ

開、基、せ、し、鑑、真、所、持、の、普、賢、菩、薩、の、像、と、置、法、華、お、し、華、嚴、經、の、普、賢

行、願、品、を、貼、し、も、う、ん、ん、時、二、聖、二、天、十、羅、刹、女、出、現、し、種、々、の、異、異、と、ら

日幾くも思ひ五十七日とを歴く去らまゝ一も然して風は高く  
布に招提寺と創りて後佛舍利三粒ありひい喜提樹の珠數を送り其後  
宝亀五年弘法大師誕生より成長の後空鉢の門へて戒を受玉ふ故に空の  
宇に附給ふ而して當山に來り千手千眼の大慈の像を一刻に刻りて作せ  
まひてあり安置し寺に千光院と稱し眞言秘密の道場と給ふと

元亨釈書卷第一傳智一之一曰

釋鑑真八世姓淳干氏ニテ唐土揚州ノ江陽懸ノ人ナリ齊ノ國ノ辨士ル淳  
干髡ガ後裔クリ中唐玄宗天寶十二年ノ冬副使伴古カ舶ニ乘テ思ノマ  
海上ヲ凌ギ天平勝寶八年甲午ノ正月十二日太宰府着テ程ナク四月帝  
都ニ入表ヲ上テ其將來セル物ヲ献上セラルト云ク

佛祖統紀五十四曰玄宗日本國沙門榮齊至揚州律師鑒真与齊附船  
而去王迎勞之館毗盧殿請授歸戒日本律學始此

屋島山 此山の形遠方より眺む時恰も家屋の如く故に号す

屋島浦 山の麓の海と云

屋島子城 人皇三十九代天智天皇の御宇此地に城を築き給ふと云

日本書紀曰 天智天皇八年十二月築讀吉国山田郡屋嶋城

壘底社 屋島山の麓にあり木太村新川の下にありと云

祭神三座 一 牛頭天王 素盞鳥尊 二 總光天皇 牛頭天皇の御子に  
して大歲神と云

三 道祖神 猿田彦命

傳云正曆元年寅八月八日海中小槎ありて一の壘にれい從ひ遍く漂ひ終り  
入江郷に至る槎の上小物ありて必り村民怪しむ此を官に告げ余を奉り  
て是と上る其夜里人の夢小人あり其形夜叉の如く頭は牛の角を載り  
ア告ぐ言はく余は牛頭天王なり此里民正直して誠のこゝろ存此故



金六ノ十

尾張國清洲郡より漂流して此地に来る余の祠と建て祭祀せし衆病を悉く除して壽命延長あり福ありと是よりして祠と建て祭祀し奉るかくて漂流する所の壱を以て酒と造る小其味甘美なり是をむりの皆惡疾難病を除くこと

壱底

右の壱を得所なり故に号く今八田圃の字とあり

影向墳

牛頭天皇の出現し餘所なり今尚標と残す

牟礼高松之松原

屋島の東南の麓なり今高松より志度への往來とあり

天慶元年伊豫掾藤原純友追討の大將として左衛門佐倫實下向備前國釜谷島の人戦小敗軍一當國小引退と阿波入國風と語り此所陣と取て純友の勢を數戦し官軍勝利を得て敵を討つ甚く純友勢大敗走して終に備前の國に引退せしむ

佐藤次信之碑

屋島の東坂十丁下りて麓あり往來の所の傍に此所の壇の浦との昔より五輪の石塔あり是ハ義經平氏と攻めたり此所の忠死とにげらるるに因る所のあり後世にありんが為小建らる所なりとて寛永年間邦君此石塔の形に新に碑と建させたり

石碑高凡六尺幅一尺五寸余厚サ一尺臺石高サ一尺三尺四方

下ハ切石を壇と疊き築り又次信の心骸を葬り塚牟礼村有奥小記に

元福碑石

此四字碑文上三並ア

維年壬午夏君受封讚州的為維城助確乎其忠貞真可觀焉一日講武之暇渡蘭漿飛彩鷄吳歌越唱逍遙屋嶋偶覽佐藤次信墳墓茲乃命下吏刊貞石建碑表義經負於乎君之用意也深矣哉至矣哉次信支死干元曆之昔而啣恩干寬永之今矣其幸矣哉乃命余作碑銘逐各如左曾若渠系譜載曆日月支跡操行日記所載前史所傳歷々焉章々焉胡

贅余言

於皇次信兮挺干濱危之場 酬恩致死兮百世誰曰不剛  
過盤當錯兮顯干鎮之雄 銳識定膽壯兮誠依教養有常  
尤可稱者兮維夫在將之良 建碑刊石兮遣烈山高水長  
寬永癸未仲夏上院涉筆於高松城下依

大守松平右京大夫源頼重公命 儒臣岡部氏拙齋作之

安徳天皇社

檀の浦の濱邊より

安徳天皇高倉院の王子諱仁母建禮門院平徳子太政道清盛が  
娘より治承二年十一月誕生同四年二月高倉院の讓を受二歳にて即位清  
盛夫婦准二宮の宣旨と蒙る関白基通攝政後白河法皇鳥羽殿上皇居  
一高倉上皇新院と申せし政勢といろひ給は攝政も名をうりて天下  
の夏大ゆわく皆清盛が終り然るも其後養和元年清盛没後宗

盛のを継で政事を行ふ是より前源頼朝閉東小義兵とあが九郎義  
経奥州より来つ加勢以木曾冠者義仲信濃より起る来り所合戦の  
了て終平家敗軍と都をひりて平氏の一族安徳帝と守護建礼門院等  
清盛が後室二位尼と伴ひ福急と趣くあつ溜るは筑はふ洛行是より  
一々京都一高倉院の王子尊成親王と位一即奉り十二歳の帝と成後  
鳥羽院是より安徳帝西海漂ひ此屋島上皇居ゆ故世西帝と成  
より安徳帝と先帝と稱ひ此地より一十九年一々遂に長門国赤間関  
に至り求て萌ゆ都て此邊に内裏の西趾をたててあつ社と建るあつ  
屋島内裏之古趾

壽永二年九月平家西海小漂泊の時菊池大夫胤益阿波氏部成能小此屋島小

天皇の社の南の方田圃の中より柳樹木茂りて其趾残き  
壽永二年九月の皇居を焼くもむえ曆二年二月源義経平家追討  
のちこゝに戦ひ皇居を焼く後平家を焼く内裏を  
陣ひりて



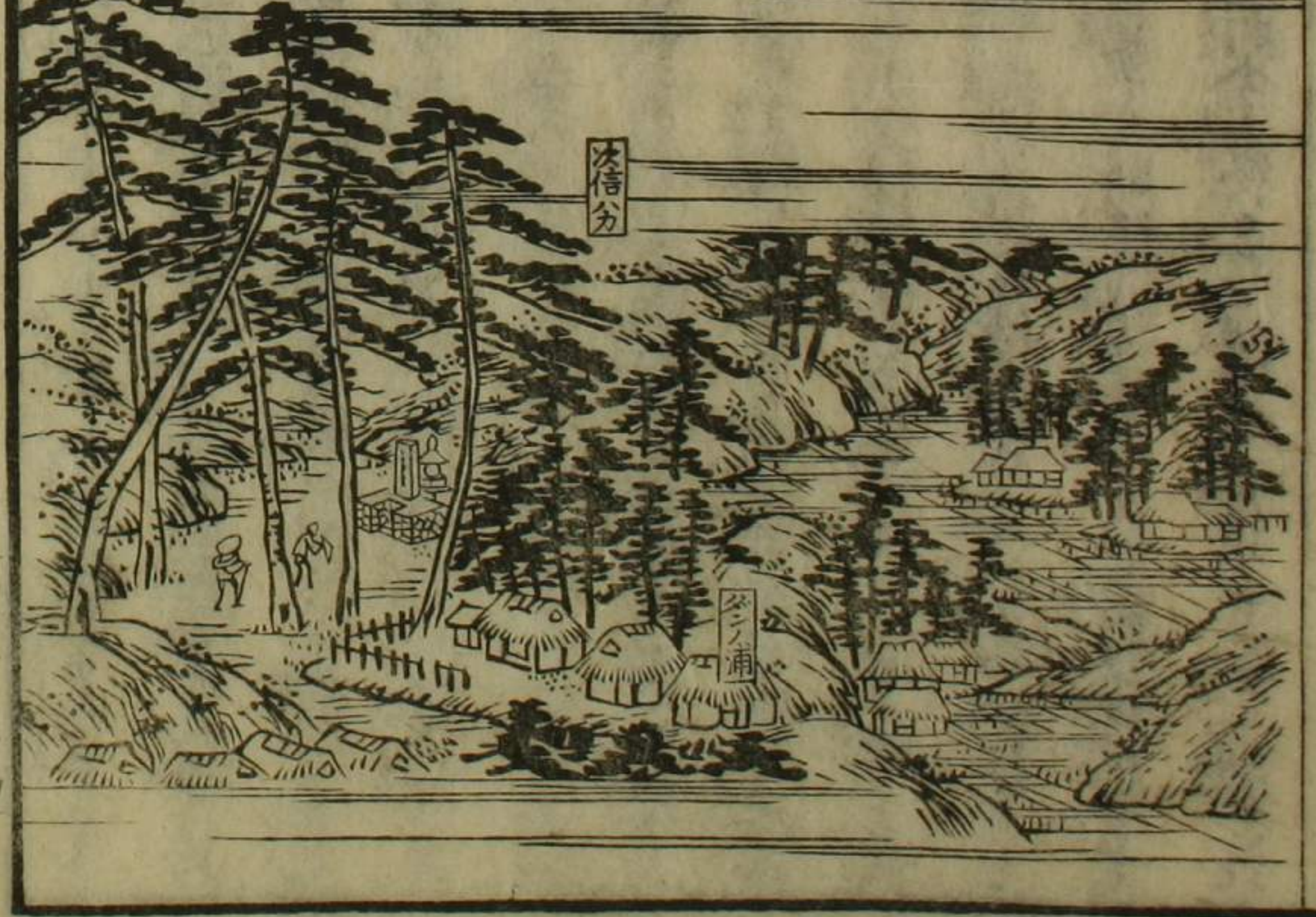


乃宋之ハ  
 張良が廟  
 脩一謝氏ハ  
 才家と得て  
 祭まう先賢  
 の微意偉  
 人の翳然  
 そらりの  
 あんぞ夫  
 志のぶぐん  
 や迹と撫で  
 人の思ふ  
 我の隆こも  
 了く君子の  
 欽むとらふ



接お  
 次信が石碑の後に古の五輪は石塔あり  
 是も人々層のむり義経の寢る  
 ちりり塔うまへ

屋島山  
 檀之浦  
 次信の墓  
 十八町下りて麓にあり  
 此地檀の浦と云  
 此碑寛永年間  
 邦君の新に  
 建せり



空と祿々小左馬頭行盛かごと祿給ひる。

君すあはれも雲井は月ふれと程あつたに都ろろる。

と是と初る人々皆涙を流しりりる。

例寄ノ堂 牟礼村より此地往昔入海の汀より今田圃とありて細き川とまきり

本尊 正観音 弘法大師作 大師堂 本堂小並ぶ 鐘樓 本坊 本堂の右

惣門之古跡 例寄堂の南より屋島内裏の追手の門の有り跡なり高凡一丈余の

源平盛衰記 大且殿小博士に清基との者と御使と能登殿へ仲らるる源九郎義

経既阿波国釜子の浦小着ると初め定め夜もとどろ中山と越え

くらん御用意のす申される去程小夜も明ぬ屋島より鹽干場一隅で

武例高松との所焼亡り平家の人のま焼亡くと云はなき成能申る今

屋島惣門之跡

往昔此地入海の磯邊あり故に惣門は清惣門の跡と云ふ

傳云平家屋島小皇居と定りて牟礼高松の海濱に

柵と構惣門と立て固とあり

然まとも潮朝夕に満干あつて常規か一千潮の

時、船は澳小出と遠ざかり

汀の柵は干涸し残つて徳氏

は固とあり惣門源氏は

門を成て平氏の害とされ

城廓とかなん人乃兼と慮



焼亡得たりと源氏所く火懸て焼拂ふと覺へる敵六万余騎の大  
勢きく御方折ふ無勢う急に御船召敵の勢隨て指せり  
御軍の侍も汀小船と用意して内裏と守護して戦ふと計い申け  
まば然るべしと先帝と始奉り女院二位殿以下の女房達公卿殿上人屋島  
の惣門の諸御船召る去来一の谷と封漏されける人あり前内大臣  
宗盛前平中納言教盛前權中納言知盛修理大夫経成前右衛門督清宗  
うり小松少将有盛能登守教経小松新侍從忠房已下侍も城中は龍丸  
大臣との父子一船に乗給ひるるが右衛門督も鎧と着て打五人と給ひ  
大臣との大制して千と引く例の女房達の中ありたるを何やと無  
慙もれ同廿卯時源氏五十餘騎と屋島の館の後より貴寄て関  
声と發り平家も声と立て戦ふ判官緝地の錦の直垂に坐坐の鎧小

鉞形打る白星の曾濃紅の纒うけて二十四指る小中里の征矢金作は太刀を  
帯り滋藤の子真中より里馬の太く逞は白覆輪の鞍と置き先陣進  
んで馬より白沐かき軍の下知りるる

西塔武藏坊辨慶判官申り予平家の軍臆しうげ侍も此方の斯  
むげに安の小子と見あうな勢いして戦いがかんと思侍り此方と又勢小  
見せ給ひくことと申られ夫は計らんと仲をま辨慶もて小軍と以  
て大敵とせらる此方と大軍と見せ侍る火を用る益とら高松の  
里の此方か大とつけて家と焼くも火の兵攻来ると思ひねと申  
りまは實さるるあつて敵の来は道の辺に休兵とつりか高松は里  
と焼小平家の方より兵候の兵と居り伺りむ此時この休兵發て是追  
かれば候知此注進は是よりして平軍大おとら内裏と出る船のれ  
しこそ此弁慶の謀孫子近而示之遠遠而示之近とくる意より此  
示而示之太とあらる

以上藤井氏の源平拾遺に委しく出せり

又曰能登中教経此時入臣宗盛殿對して申されり敵の兵多し此地と云く何  
きの國と頼侍もれ都と出―事と云く數回悔よりい給ふにれん其時西國小  
て頼侍も思いつれ斯る形勢をわきり今船のまて海に浮き終て七  
さまの今般命はけと戦いとてうり此方軍兵十人余侍る上回の戦い  
に勝負と云せん義経が事教経にせ給へ遠く射か―近く細討に對する  
下義経と殺侍る東の兵も猛も何程の事と云ん義戦に勝び  
も二百守りぬく然も教経の属る兵の遠も参り集りて心のまに戦い侍  
る下静―を給ひ軍を給―諫め申されも宗盛殿とのれ給  
て船に乗るもい―此教経の詞の計い義経と討せんも有ぬ  
くられも大将愚とて諫めを用れ源氏の方大将も兵もか―とて君臣  
一致―故に勝利と傳―

那須與市宗高祈石

洲寄寺の北ニテ余田園の中より傍小標の石と云る

元暦二年二月廿日源平の戦ふに宗高翁の的をのり此石を目のて  
―と諸神と祈り―とぞ

同 駒立石

祈石の向ふ沖の方より同時宗高翁も馬をきて射と射と古跡  
ありとをる馬の足跡あり傍小標石と云る

那須與一宗高下野国の住人那須太郎助宗が子十郎が弟あり射術と善  
とて元暦の合戦小判官義経衆軍の中より撰り出―翁の的と射じ  
む宗高兼りて則ち翁と射―海中に落し兩軍とも感嘆ほ―

源平盛衰記

源平互小申しむ―兩方引退と又た―んはる所沖に在る船一艘  
小向て漕寄に二月廿日の夏らる柳の五重の小紅の袴着て袖をかつる  
女房あり皆紅の扇小目出―と枕狭―船の船頭は立―れ射  
よとて源氏の方を招ける此女房より建礼門院の后三の御時十合  
中より撰り出せる雜司に玉虫の前もい又八舞の前も申し今車十  
九も成る雲の鬚霞の肩花の顔雪の層繪―書も筆も及びがに

那須宗高扇と射る

本朝通記

宗高早騎一々  
飾舟と望むに  
以疾風浪とあが  
浩清舟と競む  
宗高八幡の神小  
祈る風梢く靜る  
是に於て鼓と  
満て弦と登れ  
鎗失長鳴一々  
紅扇の中る扇ハ  
雲と凌つて飛騨  
船ハ空一々行侍



たり源平声成  
發々感賞以



折つ夕日小耀々最色々増々斯りも西國まぐも召具せられ  
たりと云ふと出され此物と云ふ此物との故高倉院嚴島へ御幸乃  
と云ふ本切立々明神進奉り皆紅ひし日出しと云ふ物々平家都々  
落給りし嚴島泰社より神主佐伯景廣此物と取出しと云ふ二人  
の御絶入明神の御秘藏より日故院の御情帝業の御守たぐと云ふ  
此物と持せしめいゝと云ふ敵の矢も還つて其身中り候と云ふと視言  
進せりりる此と徳氏射るがたゞ當家軍も勝下射負せと云ふ  
徳氏が利を得るあふと云ふと軍の右形も立りきと云ふ斯く女房  
のより源氏八達と見せ當座の景氣の面白く日と夜馬と心と  
迷へる者もあり此物継々射り候と云ふと胆膽と作り難唾と飲る者も  
りの判官畠山と召し重忠木蘭地乃直垂に搦縄目のより召し大

中野の矢負所藤の弓の真中より騎の馬の大逞し金覆輪の鞍は判  
官の弓手の腋に進出畏候義経女愛る者平家と云ふ  
斯構たゞ定めて進出候と云ふ所と射手と用意と真中と當  
て射落さん徳更と心得る所の射らまふと宣ふ畠山畏つて君  
の俤家の面々存る上子細と申す及但し是ゆり暗藝ある重忠  
打物取へ鬼神と云ふも更々辞退申す地体脚氣の者ある上此間馬  
と振きて氣をささ手つらに覺侍り射損して私恥事と云ふ  
源氏一族の御瓊璣と存り他人の俤と申し畠山かく辞りる同諸人色  
失あつり判官と云ふ誰有れば尋ね給へ畠山當時御方へ下野国往  
人那須太郎助宗が子十郎兄弟と云ふ加様の小物賢く仕つり候彼  
と召し一人いひ候り候も強弓遠矢打物あつり候俤蒙るは

と深く申ゆらうと平太郎と名まはる禰の直垂洗革の鎧は日の貫干  
四指たる白羽の矢は笛藤の弓の塗籠る真中取備と下はふらうらげと  
を垂たる判官のの儀はうれし伸に御被の上子細と申は皮の〇も一の  
各の巖名は落せ時馬弱くく子午の臂は沙つるを侍りく冬は  
つと愈は小振りと定の矢はつらねもなせは弟と候は子冠者小  
兵と侍も懸鳥的おどろく希らう定の矢はつらねもなせ  
伸下と下と身は譲り引くく無市と名れく其日の装束は緋  
村緋の直垂は桃威の鎧鷹の用及曾居頭はく二十四指たる中黒の矢負は藤  
の弓は赤銅はくうの太刀と帯と宿赫馬の太くなくは子鳥の飛散  
たる具鞍おとく乗らうなはなとくみ出く判官の前は弓取おど  
く畏らうあゝの病はらう晴乃所作を不覺とくこのく子一

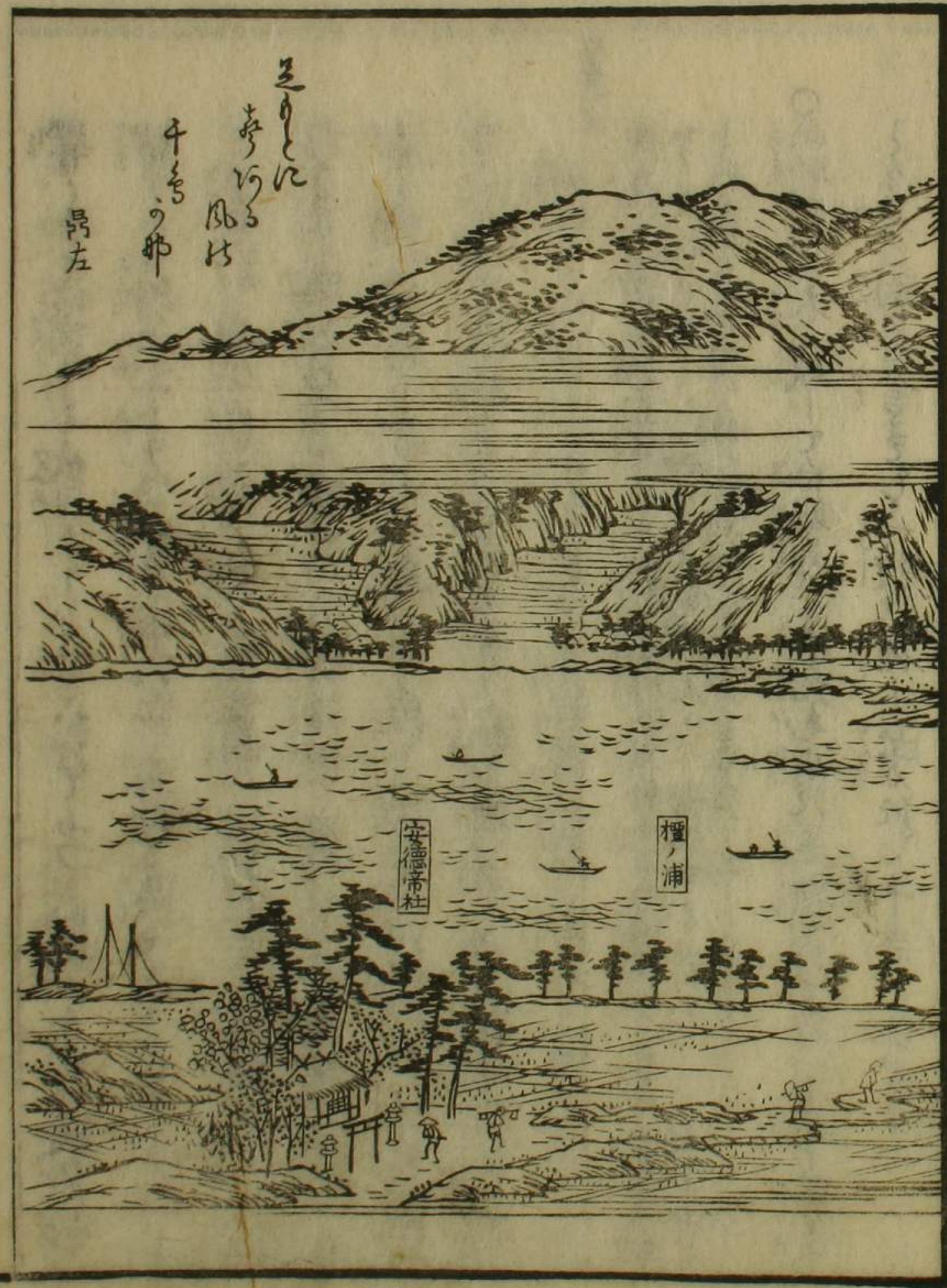
金六元ノ卅

伸兼より子細はふらんとする所小伊勢二郎義盛後藤兵衛尉實基は與と  
判官の前は引居く面々の故障は日既小暮おんは兄の十郎と申は六  
子細は有る疾く急に給へ海上暗く成るゆは御方の大事なり早  
くくつひらきと二滅と思ひ胃を脱量小持は孫鳥帽子引は薄紅梅  
の鉢巻は手細搔らう物の方と打向いら生年十七歳色白く小髭  
おい子の取やう馬の乗貌は優ある男と見えくはる波打際打寄  
て子手の沖と見渡せば至上と始め奉る母建禮門院北の政所方は女  
房達御船との數漕お屋形くの前は御簾も机帳もさうあはらう  
袴温帯の塵もく揚梅桃李飾られく塩風くくく虚焼車の中を  
通はる妻手の中と見渡せば平家の軍將屋嶋大臣と始め奉る子息は衛門督清  
宗平中納言教盛新中納言知盛修理大夫経盛新二位中将俊盛左中将清

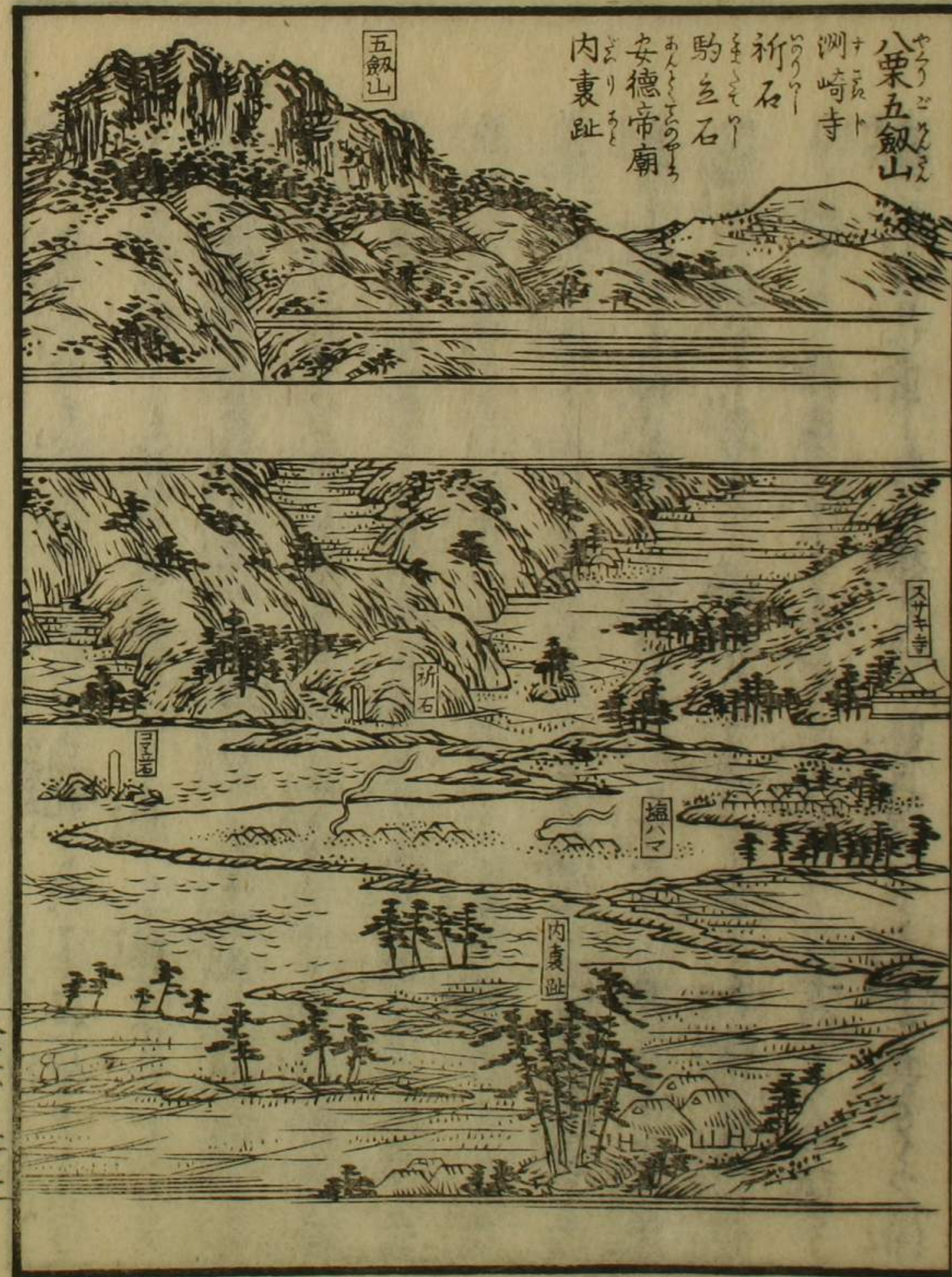


經新少將有盛能登守教經侍從忠房侍、越中の活良兵衛盛嗣、惡七兵衛  
 景清、江比田の五郎、民部太夫等皆甲冑を帯りて、數百艘の兵船と漕舟とを  
 是と見、水主握取に至るまで、今日と晴とを振舞、後の陸に頼み、涼  
 氏の大將軍太夫判官と始め、畠山莊司治郎重忠、土肥治郎實平、平武吉、吉  
 季重、佐伯能澄、子息平六能村、同十郎能連、和田太郎義盛、同二郎  
 宗實、大田和四郎能範、佐々木四郎高綱、平左近太郎為重、伊勢二郎  
 義盛、横山太郎時兼、城太郎家永等、漁氏大勢とて、書と並て是と見る  
 定の當りと知り、され、源氏の兵の多く、手とを振り、これ、沖、渚、も推して  
 何もの所も、晴と思ひ、其所も遠浅あり、鞍、几、鎧、の、菱、縫、板、の、浸、る、まで  
 打入なま、も、沛、文、の、馬、も、ま、海、の、中、に、と、ま、り、り、り、手、綱、と、ゆ、り、り、鎮  
 むれ、も、寄、る、小、波、も、物、怖、ま、り、て、足、も、と、ま、り、狂、い、り、り、羽、の、こ、も、急、と、見、れ、バ

折、し、西、風、吹、来、つ、て、船、の、艦、舳、も、動、れ、つ、つ、羽、枕、も、な、ま、り、緑、も、り、り、廻、り  
 り、何、の、所、と、射、へ、も、覺、の、興、ハ、運、の、極、り、悲、し、て、眼、と、ふ、さ、れ、心、と、静、ま、り、て  
 飯、命、項、禮、八幡、大、菩薩、日本、国、中、大、小、神、祇、別、々、下、野、国、日、光、宇、都、宮、氏、の  
 御、神、那、項、大、明、神、弓、矢、の、眞、加、有、く、八、羽、と、座、席、お、定、り、て、給、源、氏、の、運、も、極  
 ま、り、家、の、果、報、も、尽、く、い、矢、も、放、く、お、前、に、深、く、海、中、に、沈、み、給、へ、と、祈、念、し、て  
 目、と、閉、り、て、見、え、ら、れ、八、羽、座、と、静、ま、り、有、撃、物、の、射、り、た、れ、夏、山  
 の、滋、緑、の、木、間、と、り、僅、く、見、ゆ、小、鳥、と、殺、さ、れ、射、る、と、大、事、お、れ、捷、と、て  
 立、た、る、八、羽、の、神、力、既、お、り、副、だ、ま、り、手、の、下、に、し、思、ひ、つ、十二、東、二、伏  
 の、鑄、矢、と、抜、出、し、丸、や、り、つ、滋、藤、の、弓、握、ぶ、と、あ、り、打、食、り、せ、能、く、暫  
 ら、固、め、ら、る、源、氏、の、方、と、り、今、が、打、入、給、へ、と、り、七、段、と、り、り、阻、り、  
 八、羽、の、紙、と、白、と、半、た、れ、恐、ま、り、牧、月、此、程、と、り、主、守、と、兵、と、り、り、浦



足利  
 寺  
 千手  
 の  
 御  
 左  
 馬



八栗五郎山  
 湖崎寺  
 祈石  
 駒立石  
 安徳帝廟  
 内裏跡

五郎山

又吉寺

祈石

堀八

内裏跡

金六ノ卅二

響くまで鳴りしむ敵目より上二寸おちてうつと射切らるれば敵目も船に  
留りて扇空およりつ暫く中にひらちれて海へうつと入る折ふ  
く舟にかやれて波に漂ふ有る處龍田の山は秋のさき河瀬の紅葉に似  
かたむき鳴矢おちて潮にうづる便の浮洲と覺えらる平家船と扣して女  
房も男房も射り感づる源氏鞍の前輪籠と扣して射  
り感づれば船もとどめて有る紅の羽の水に漂ふ面白さ玉典ハ  
射ぬぬおや紅も見はるる苦味初瀬の藤の影と  
陣羽二種は紅白出する羽是大将又軍師おりの惣地紅と目のおらる金  
か又紅の目出する扇は是副将おらる惣地金と目のおらる来して書  
し熱まば此時の扇惣地紅いと金の目の内とせしるるる

○此時判官大い感して白駒馬の尾尻毛馬に黒鞍おけて與一賜ふ子失  
く身の面目蒼言まると一時に施し芳れと千歳お流せり

景清頼良之古趾

駒三郎の辺りに今字と大各地の所其古趾ありしを實不詳なり

那頃與二宗高羽的射落し續て伊賀十郎兵衛尉家貞射倒は是依り  
源氏籠と扣してとどめても平家は本意あり思ハ指突一人取一人長刀  
持武者二人都合三人小船に乗陸お押つけ浦よりて楯と突向け寄りと源氏と扣  
く判官安らぬ夏より馬強めん若武者も馳よつて蹴らせし宜ハ武藏  
国の住人美尾屋十郎同藤七上野国の住人丹生四郎信濃国の住人曾  
中次五騎つきて喚わける先真と進んぐる美尾屋十郎が馬の左の鞆を  
箭の藏り程を射めん馬は尻尾とわげぐく忽ちと倒るれば主ハ  
弓手の足もと馬手の支下りまで傾て太刀を抜さるる又楯の陰より太長  
刀打つてかゝるれば美尾屋十郎が小太刀大長刀は叶ハしと思ひり貝吹く  
途に傾て續て追駈さる長刀と薙へると見ると無くて長刀と

弓手の腰に矢狭し馬手の手と差のぞ美尾屋が曾の鍛と相すんは相すれど  
 逃る二度つゝと逃して四度の度むつと相む暫しを勘と見しは鉢付の板より  
 よくと引切てを逃さう々々残四騎馬と惜とかけ見物して居るうり美尾屋  
 十郎御方の馬の陰に逃て息つゝ居る敵追々も来ら其後曾の鍛と長  
 刀の先責む高きと上合声りて遠くへ着音も聞け追は自らも見む是と  
 そ京童の呼るる上総悪七兵衛景清と名乗捨御方の楯の陰を除きあ  
 平家おきて以て少し心地と直つ悪七兵衛討する者にも景清討する續けと  
 て二百余人清より楯と唯羽に突るる源成の寄とやしてを招きとるごと  
 此條普く人に贈灸とくとも源平盛衰記に見へ只丹生屋十郎とりの馬  
 射られて落る所と景清長刀を額にやて飛でかる十郎とるべと思ひ逃げ去  
 ると道より追も逃るも雷のどく十郎希有と逃のびる事と書くを追来  
 の繪本に此條を載なきも其事實詳々ありけ

景清頼引



相引の入海はさうに頼引  
 川をわたり平家の軍門は  
 田畑の中はのらる景清乃  
 勇戦のゆゑも又同ト  
 みよのやう鞆のゆゑも  
 七兵衛が  
 田はさうとひく  
 楯のさう里  
 平満庵

東鑑曰是清等平士憤之登行戦美尾屋十郎等逆戦不利  
 又鞠と引切る事ハ越中守郎兵衛盛嗣熊手とりつて小林神五宗行の曾一打り引倒  
 こんとせに宗行頭と動るに双方引程一鉢付の板より引らるる漁平両陣乃  
 月と驚きやいとつる更りく是等の更し取交る附會さるるのあらん  
 大胡小橋太水練高名之古趾 祈石より六十余西北の方に有り

小橋太ハ伊勢二郎義盛が郎等いり駿河国田子の浦工生立て幼少く軍  
 川にて水練と得水底ハ一日も潜り歩く事と難しとせ原平あつて公戦の  
 時平家方備後国の任人頼の六郎といふ六十人カのカ持る大強の者ゆり  
 と宗盛下知して義経近つたに組で海も入る程隔たる遠矢も射るるせ  
 て船に乗らまゝに松浦太郎壘とて屋島の浦と漕よりり判官と伺ひる  
 此時小橋太是見て兵の船に乗らる軍もせ漕よりる直者といはれ當り大  
 將軍と稱し曲者といふと今も知れ焼内裏の芝筑地の陰より裸よりりて犢

大胡小橋太水練高名

鷹ハ水にへく藝あり鶴ハ  
 山に在て能くしとこし  
 六十人カと剛勇の六郎  
 けそとも小橋太が水練の謀小  
 術あり空しく水中に首と  
 かれち依



鼻禪と極両刀を拵んで海へ入る御方も曾て是と云ふ拵て六郎が船に近づき  
 上つて六郎を足と懐いて曳声といひ海中より今六郎も陸地へ出て六十人の力  
 言れども水は心得ざらん深き所へ引入れらる終小首と取れる小橋太六郎が頭  
 切れ切て髻と口と水底とくちめて御方の陣の前より大将義経其思慮の賢  
 と感とらひ就鳥作の大力を賜ふ世静まつて後兵衛佐殿も武藝の道神妙之  
 とて千餘石の勸賞を賜ふ滅にゆるしに面目なり

源義経弓流之古蹟

源平盛衰記

平家二百余人船十艘に乗楯十枚つらせ漕向て族と汰て散々小射海  
 氏二百余騎書と並べて波打きし歩かせ出て是と射る矢の飛ちし降  
 雨のとき源平の叫ぶ音は百千の雷の響くに似たり平氏の浪は浮きし源  
 氏陸地へ入りて天帝空より降る終羅維海より出て互ひに火焔劔戟を飛せし

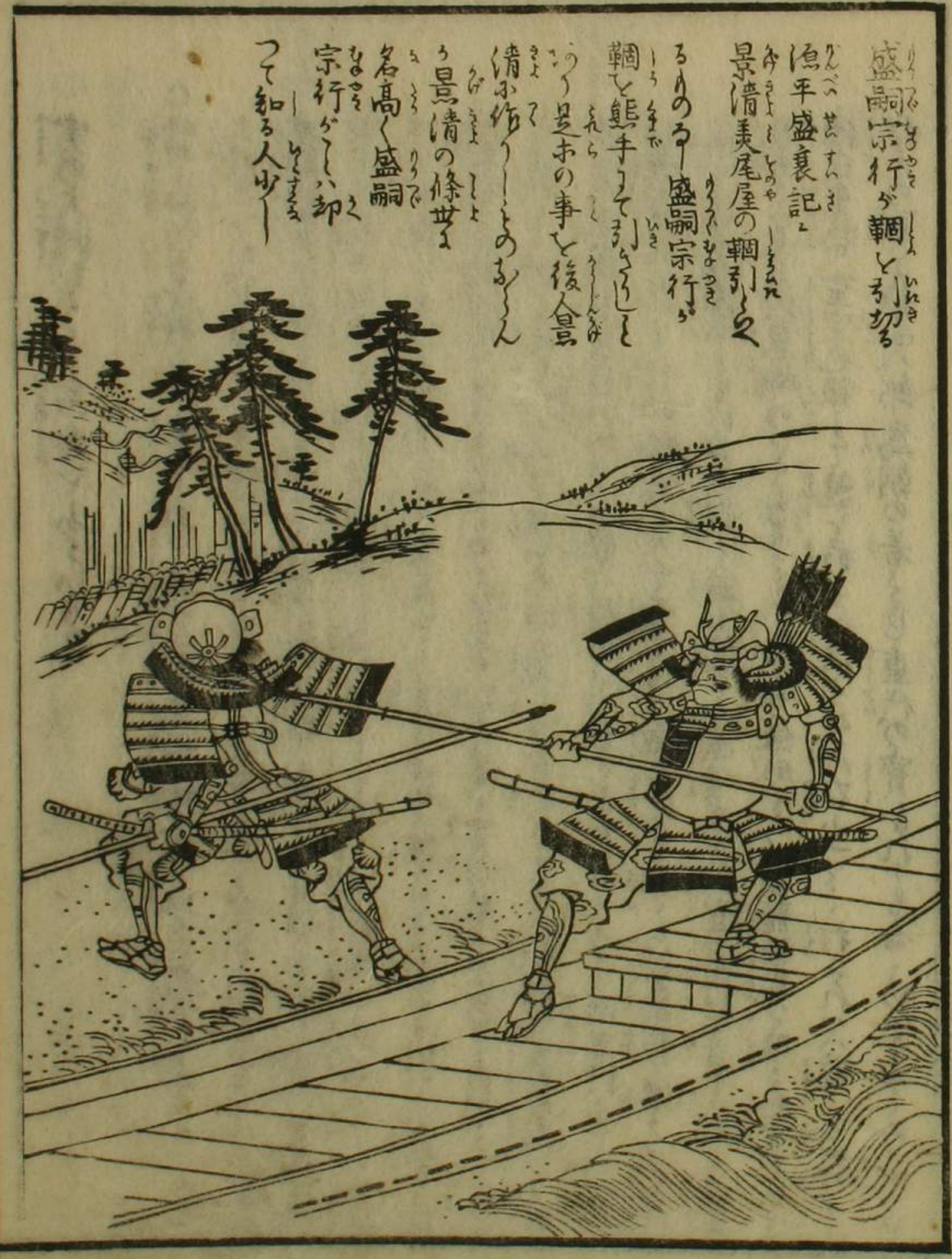
義経握弓

詠歌尋訪五  
 條宅横笛吹  
 回一谷風壯  
 士勇名皆若  
 是九郎不失  
 楚人弓

羅山林先生贊



二世休比戦も斯や覺て無慙なり平家射調まて船も少く備くは  
 判官勝あつて馬の太腹を打て戦ひたり越中の治郎兵衛盛嗣折と得  
 と悦びて大將軍に目とけて熊手と下判官とめけん打つけり判官  
 鞆と傾ふけて懸らきとて大刀とぬき熊手と打のめり程一服挟  
 なる子と海を落り判官の子を取上らん盛嗣判官とけり引  
 と見えり危く見れば源氏の軍兵は如何し其子捨つと声ぐ  
 申れども太刀と持て熊手と會釈いたの手鞆と取て楯とせと取れり軍  
 兵等が従ひ金銀とのべり子も思壽と替へ給へば浅猿と  
 申れ判官軍將の子とて二人張五人張の面相なり去りも平家  
 に貴は多くて子と落りて彼も此も強を弱とて披露  
 んと口惜がど又兵衛佐の漏さるんも言甲斐なれば相構て取らる宣



盛嗣宗行が鞆と引切  
 伯平盛衰記  
 景清美尾屋の鞆引と  
 るりのり盛嗣宗行が  
 鞆と熊手と引とけり  
 つく是ホの事と後人言  
 清お作りのあふん  
 う景清の條世  
 名高く盛嗣  
 宗行がは却  
 つて知る人少





傳云人皇百一代後小松院至徳元年四月五日奥州住人佐藤の二門空信と云僧此  
 地お来り次信の石塔に續ぐ追悼の和歌と録に

痛しやまの命とつと信がまきけ石の苔衣きて

空信一夜此石碑の辺り宿り其夜夢中次信の靈顯まき

惜むもよもよと念はるをたててそくんとつぎは

と誦くくく一書は信空より何をも是あつて武まき

佐藤次信心信兄弟大職冠録足公の末兼奥州信太庄司佐藤元治が二子あり  
 兄と二郎兵衛次信といひ弟と四郎兵衛忠信といひ共鎮守府將軍秀衡を臣多  
 源義経兵と起ひの時秀衡二士と以て義経に属し兄弟東奥より發て所  
 の攻撃武功ありつと事なり然るも此屋島の戦ひ源平雌雄と争ふ次信  
 羣と出く大将の矢表に進み教経の矢とくけく此より死にたり



次信の靈空信が  
 夢中歌と返り



源平盛衰記卷第四十二 上畧

判官の乳母子奥州の佐藤二郎兵衛次信は黒革威の鎧と着るる首  
骨と射貫れ真逆と落るる能登守の童に菊丸と名づる者あり本  
通盛の下人らるる越前二位討きて後其弟らるる此人は属する者  
崩黄糸威の腹巻は左右の射鞆とて二枚胃と居首に着かす太刀と拔と飛  
でかり次信が首と取んとする郎兵衛忠信を留り引固て放つ矢小菊丸が腹  
巻の引合せつと射貫ぬれて一足も引ば覆り倒る忠信が郎等に八郎爲定小  
長刀と以て用ひて童が首と取んかゝる能登守童が頸と取ま下と太刀と  
打ちつとつとつと童が手ととり引立ち曳声と出さし船も上げ入る暫  
し生ぐ毛有らん余り強く投られて後音もせぬ死する忠信は此間  
に兄次信成肩より引つけはく陣のうら負て入る判官ちくちく飛り

給ひ如何に次信は義経の如く一死を以てその契り先立るるの悲  
しうも後生と吊るる其途の旅心安く思ふ備も何事と思ふ言ふ  
うし宣ふも涙と流しけし是兆の返事なる判官もめて汝心が有るそ  
涙と流すも猛と兵の矢しつと中つて生る言つる言つる我はあ左  
への後きたる者も存せざるものと今一度最期の言問せよと宣ふは  
信も必し出さし苦しげと息の下に寸矢取身のおひなり敵の矢の中  
つと主君の命は替る兼く存ざる所は更恨むらうと思ふ言ふ  
老る母も捨て親しむ者もも別き途は奥州より属奉るも心  
平家と討てり日本國と奉行し給ふと見奉つんと存せし先立る  
する討つとも心かり侍り老母を歎も芳しく申しられは  
猛と武士もど判官あはれとて流し給ひる實と思ふ

も理り敵と亡やんて八月月夜経べり義経世の河に汝兄弟と  
 あそ左右小三と思いつるゝ手て手と取合せて泣くは次信ハ穴嵜  
 と其と最期の詞と息絶るゝと無慙あれ此と阿も兵ども甲  
 の袖と紋と

義経乘馬太夫黒之墳

次信の墓の左の傍あり碑の前標石とて太夫黒馬埋所ト勒ス

元暦二年二月廿日源平屋島に戦ふの時既紅日西傾はるる郎等の内  
 て四天王と稱せ鎌田の藤次光政討死し佐藤次信ハ能登守教経の矢先中  
 へ死なれり義経只管悲嘆し給ひ此日の軍ハ是とて共武例高松の柴山  
 へ飯を給ひて其邊りて尋ひて僧と續し薄墨しり馬ハ金覆輪の鞍と置  
 申るる心静ふる想よとて申べれども斯る折ありんば此馬鞍とて御房  
 庵室にて卒都波安経書佐藤兵衛尉継信鎌田藤次光政と回向して後世と



太夫黒馬墳

太夫黒馬塚

次信の塚と  
 吊し  
 光陰  
 今  
 血乃あ

一禪

吊し給へて舎人に引せし僧の庵室を送らまはるる事ぞ

此馬ハ始り安部貞任が里の末として足利馬の少いふらうらうが早きとの

一物より其の馬の中に鎮守府將軍藤原秀衡より秘藏せりりりと判官

奥州と進發の時進らせし馬として始の名は伏墨と云つて既し宇治川と

も渡しの谷にも落せし一度も不覺うられ吉例と言ひて判官五位尉に

成りし此馬に乗せられ改て太夫里と号しりりし時身と放たしと思ひぬひけ

れもせめては継信光政の悲しき中有の路も乗うとして引れしは兵ども是

と見て此君のふらに命と失りしと惜しむるを面々たる然る此馬夫よりして秣

と喰ひ自ら草庵へ入れば厩もあつた鴨部村の極樂寺に送る此時次

信と埋し墓の前と通るゝ忽ち舌と喰切て倒れ死しと云ふ

と云ふも中心義と云ふ死し次信と云ふも夏感と云ふ絶え其は依て此

地埋して塚の標と残せし時寛永二十年癸未夏邦君是と憐し給ひ此所へ碑  
と建させしを 碑文銘はらりる拾遺の篇に云ふ

東鑑曰廷尉家人継信被射取畢廷尉大悲嘆喞一口衲衣薙千株松木以秘

藏名馬賜件僧ト云

武例高松柴山 次信の墓の後の場より末の方より池の向ふ柴山あり夫源氏が岡  
ト云又棧ト云岡ト云

是則ち源平盛衰記に武例高松と云柴山に飯り給ひてと云古跡あり又平家

の屋島の焼内裏に陣と取る源平兩陣の間三十余町と隔らうと云

前義経此在家と放火し屋島の内裏と攻るゝつゝ八則ち此傍の在家より

武例の今も尚牟礼村と移り高松今鎮城の名と移る故古高松と云今

の高松と別所なり思遠と云

武例高松の間とて義経の考へ言まはる平家と追討し八討べし

と敵此方の兵の少れを見りて有るに二分て一手ハ先陣より残る兵  
後より漸く来らむとせし源氏の兵多し加りたりやと思ひ疑ひて  
此方の勢いと得んと言ひく余せしは是れ考へて有る少く軍ハ  
多に採り見せしむる勢いと得り以上は平捨遣出

瓜生山

源氏が岡の東にあり同陣所の古跡あり雨龍山とも云

鞍懸松

飯束村の街道の傍より今樹下に小堂ありて地蔵尊と安ん義経の鞍と云

義経阿波国釜子の浦に著し勝浦勝宮を歴て阿波一瀬岐の境より中山

の山口に陣しより翌日引田の浦入野高松の郷にも打過て屋嶋の城に押寄け

るや盛衰記見よ此時此休し東馬の鞍と松を置け馬と休め給いと云

榮松山喜岡寺

飯束村より高松左馬之助が居城の跡ありと云

本尊 不動明王

靈驗奇瑞ありと岡田より八拾遺の篇に出

高松左馬之墓

行山志摩守墓

唐人彈正墓

右石碑三基本坊の後より墓前には燈籠と建

喜岡之古城

則ち右喜岡寺の地より高松左馬助は山人といふに二百余人といふに付先

南海台記

天正十二年四月浮田八郎秀家備前美作の兵二万五千人其六人の兵將

二万二千人を以て備前へ發向し四月廿六日に屋島の浦小到着し北の峯に

旗を押し上り國中の人民ををを見り騒動をを更け計あり北の峯分

内狭迫して兵を留めがた故に南の峯小移る此山上代の名城とあれ

も山高し戦いしるに用ひ其日下山して牟礼高松よりあり

爰も喜岡の城と小城あり高松氏世々の居城なり香西伊賀守を旗

下おれが加番として唐人彈正行山志摩守と兵將として百余人指遣は高

松左馬助が百余人といふに二百余人を以て城に守るト云



や  
 ー  
 工  
 七  
 五  
 三  
 二  
 一  
 屋嶋山南麓  
 古高松  
 喜岡寺  
 鞍懸松

古高松

喜岡寺

金六ノ四十四

有来此城堀塹堅固ありとも二万余兵天地と響響が攻寄る申す終小  
防戦とて能く二百余人一人も残らぬ此に討たれども

其後生駒濱岐守正當国と領し給ふに唐人彈正の男判左門七百石  
て召抱らるる山志摩の男九左門百五十石を召出されしを

平家蟹

屋島の浦より其形甲に鬼面ありて怒るがごとく土人云平家の勇  
士戦死の霊魂也とてとらるるよし全く好ま者の附會とてとらるる  
此よりいふは諸所より其名と異なり

本草綱目云蟹之小者名鬼蟹食之害人と則是也

兵庫及び明石の浦の鬼蟹俗稱武文蟹とて其大者三尺許り元弘の  
乱に泰武文攝州兵庫の海に死に故に号く享禄四年細川高国に好む柄  
洲に戦ふ時細川の家臣嶋村何某敵二人を挾て尾崎の水中に没死に故に尾崎  
の浦小生とて小鬼蟹と俗呼ぶ島村蟹と白其大者二寸圓くして腹の女鬼面のじ

中海流もあつて流石に平家あり  
涼菟

蟹のうらみひくく八幡の虫竹杖  
玉鉉

解乃月小月呀わつる屋島う申  
箕山

神櫛王之墓 太夫黒の塚の上の方あり土人王墓又大墓青墓とて云り又王墓山と云

神櫛王八人皇十二代景行天皇第十七王子として當国と領し給ふ故に屋島  
山に宮と造りて住せ給ふ墓とて後此所に葬りて又神櫛王の御館の趾  
とて字に王屋敷とて地あり是は惣門より一丁許東の方あり

長刀泉 王墓より一丁余南田圃の中にあり往昔武藏坊弁慶長刀の石つとを以て穿せ

菜切地藏 同所の山の上あり此辺とて源氏方野陣の趾として長刀の泉とて兵

見君臣の遺跡の依り  
土人口碑に残るるを以て次お著る



義経の  
 陣と張る  
 武藏の辨慶長刀  
 穿ち水とちけけの石の  
 地蔵と倒し真菜板  
 刺しけけ和判官に  
 義経たのめ  
 舟屋が整へけけ武蔵坊  
 トのこいれは舟屋の  
 左指のいし  
 舟屋判官

金六ノ四十六

六萬寺之旧址 辛礼村のり

當寺入皇四十五代聖武天皇の御願よりて國中の民庶六万余戸の力を合せて  
 建立せし伽藍あり壽永二年の冬平家の二門屋島に來り籠城のとき平家の  
 一族経浦房阿闍梨祐圓本三位中将重衡但馬守經政此寺小入て止宿し海兵  
 疲勞と休められ時各和歌と詠ト佛殿の内陣の戸小自筆して書附手号  
 月日とて結置きしとて

辨納言重衡  
 經浦房祐圓  
 兼但馬守經政  
 世の中八昔語にぬれもど紅毛此をいんせありり  
 允曆二年佐藤次信戰死の時兵器と此寺に納むる源九郎判官鎮守明神祈誓  
 の願文あり元徳年間高松二郎本地堂十王堂鎮守宮権現祠と建立し負





郡の阡陌として王制の基本は是に依り此浦繁高して其の高一牟礼に六方寺あり庵治六方貫寺あり方貫寺の因基僧一人一錢の助力と勸め百万人の放財と受て建立し寺を造る故六方貫寺とあり時去り世久し寺院断絶ともいふも名の残りに王代の餘波に寛文年中牟礼の村長中村某といふ者草廬と六方寺の蹟に造る燧山の律師と招居して庵主といふ邦君ありと美まひと六方寺と寄附して昔の跡と後世に垂ぬふとと老父夜結記に見たり

南海治乱紀續州浦島下知之記云

應仁元年夏細川勝元より御教書と下り給ひて樺州浦島に御智れて曰今度防州凶徒有渡海之期當國浦島之諸人堅守定法不可為海路之禍殊至海島之漁人者召集于本浦可令安居也海邊之頭人等當集知應仁元年五月日判右國中の諸將出陣の時海邊と守る浦長より先引

田之本松寒川領也小豆島属之津田志度安宮領也屋島香西香西領也直嶋塩飽島属之宇足津御世所奈良領也度津觀音寺香川領也菅水崎属之各守拒の兵有て其浦と守管領家の命と受行ふ也又豫州能島兵部大夫より飛船とまきりて曰今度大内家河野家の軍兵君命に依て上洛せむる所也軍兵甲し人乱妨と禁止し船中雜用ハ價と出て償と押買と禁止し船頭人役者の外船中より人衆上陸と禁止し海島諸浦の人等宜知と之とて制札と出て浦長遣一通船に故に海邊も騒動せし通船は憂もる是彼我共ハ公儀の役として私にゆゑ事と示し者也仁政と云ふ平城の道を行ひて久智の久智の夏は是故に洛中ハ敵に成身方と成て戦ひと挑むとて海邊の地下人信財貨と通用して何の煩勞もかすト云

右の條ハ此地に拘りし事とて浦島の因より云

是亦次八栗五劍山の靈場と始り志渡の浦の古跡志度寺の縁起海士の物語より長尾寺廻山靈芝寺及び津田の松原鶴羽の濱白鳥社大窪寺晝寐の樓小叢の龍佛生山虹橋一之宮龍の宮中間の天神六妻山其餘此編に洩たると委しく著し且西嶺小松尾寺雲邊山又古城乃跡古戦場の軍供亦悉く圖繪を加て後篇に嗣ぐ出ん者也

曉 鐘成謹誌

金毘羅叅詣名所圖會卷之六 大尾

金六ノ四十九

弘化四丁未年三月新刻

書林

同 順慶町心齋橋	同 南久宝寺町心齋橋	大阪 鹽島	京都 三條通寺町	同 大傳馬町二丁目	同 芝神明前	同 日本橋通二丁目	江戸 日本橋通二丁目
堦屋	堦屋	鹽屋	丸屋	丁子屋	岡田屋	山城屋	須原屋
定七	新兵衛	市郎治	善兵衛	平兵衛	嘉七	佐兵衛	茂兵衛

